

二〇二二年度

国

語

(B日程)

(解答はすべて解答用紙に記入しなさい)

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、一部省略した部分があります。)

特定の目的に向けて他者をコントロールすること。私は、これが利他の最大の敵なのではないかと思っています。

冒頭で、私は「利他がらい」から研究を出発したとお話ししました。なぜそこまで利他に警戒心を抱いていたのかというと、これまで研究のなかで、他者のために何かよいことをしようとする思いが、しばしば、その他者をコントロールし、支配することにつながると感じていたからです。善意が、むしろ壁になるのです。

A、全盲になって一〇年以上になる西島玲那さんは、一九歳のときに失明して以来、自分の生活が「毎日とはバスツアーに乗っている感じ」になってしまったと話します。「ここはコンビニですよ」。「ちよつと段差がありますよ」。どこに出かけるにも、周りにいる晴眼者が、まるでバスガイドのように、言葉でことこまかに教えてくれます。それはたしかにありがたいのですが、すべてを先回りして言葉にされてしまうと、自分の聴覚や触覚を使って自分なりに世界を感じる事ができなくなってしまう。たまに出かける観光だったら人に説明してもらうのもいいかもしれない。けれど、それが毎日だったらどうでしょう。「障害者を演じなきゃいけない窮屈さがある」と彼女は言います。晴眼者が障害のある人を助けたいという思いそのものは、すばらしいものです。けれども、それがしばしば「善意の押しつけ」という形をとってしまう。障害者が、健常者の思う「正義」を実行するための道具にさせられてしまうのです。

(中略)

ここに圧倒的に欠けているのは、他者に対する信頼です。目が見えなかったり、認知症があつたりと、自分と違う世界を生きている人に対して、その力を信じ、任せること。やさしさからつい先回りしてしまうのは、その人を信じていないことの裏返しだともいえます。

社会心理学が専門の山岸俊男は、信頼と安心はまったく別のものだ³と論じています。どちらも似た言葉のように思えますが、あ

る一点において、ふたつはまったく逆のベクトルを向いているのです。その一点とは「不確実性」に開かれているか、閉じているか。山岸は『安心社会から信頼社会へ』のなかで、その違いをこんなふうに語っています。

信頼は、社会的不確実性が存在しているにもかかわらず、相手の（自分に対する感情までも含めた意味での）人間性のゆえに、相手が自分に対してひどい行動はとらないだろうと考えることです。これに対して安心は、そもそもそのような社会的不確実性が存在していないと感じることを意味します。

安心は、相手が想定外の行動をとる可能性を意識していない状態です。要するに、相手の行動が自分のコントロール下に置かれていると感じている。

それに対して、信頼とは、相手が想定外の行動をとるかもしれないこと、それによって自分が不利益を被るかもしれないことを前提としています。つまり「社会的不確実性」が存在する。にもかかわらず、それでもなお、相手はひどい行動をとらないだろうと信じること。⁴これが信頼です。

つまり信頼するとき、人は相手の自律性を尊重し、支配するのではなくゆだねているのです。これがないと、ついつい自分の価値観を押しつけてしまい、結果的に相手のためにならない、というすれ違いが起こる。相手の力を信じることは、利他にとって絶対的に必要なことです。

私が出産直後に数字ばかり気にしてしまい、うまく授乳できなかつたのも、赤ん坊の力を信じられていなかったからです。

B、安心の追求は重要です。問題は、安心の追求には終わりがなく、赤ん坊の力を信じられていなかったからです。

信頼はリスクを意識しているのに大丈夫だと思ふ点で、不合理な感情だと思われるかもしれませんが、しかし、この安心の終わりのなさを考えるならば、むしろ、「ここから先は人を信じよう」という判断をしたほうが、合理的であるということができます。

利他的な行動には、本質的に、「これをしてあげたら相手にとって利になるだろう」という、「私の思い」が含まれています。

⁵重要なのは、それが「私の思い」でしかないことです。

思いは思い込みです。そう願うことは自由ですが、相手が実際に同じように思っているかどうかは分からない。「これをしてあげたら相手にとって利になるだろう」が「これをしてあげるんだから相手は喜ぶはずだ」に変わり、さらには「相手は喜ぶべき

だ」になるとき、利他の心は、容易に相手を支配することにつながってしまいます。

つまり、利他の大原則は、「自分の行為の結果はコントロールできない」ということなのではないかと思えます。やってみて、相手が実際にどう思うかは分からない。分からないけど、それでもやってみる。この不確実性を意識していない利他は、押しつけであり、ひどい場合には暴力になります。

「自分の行為の結果はコントロールできない」とは、別の言い方をすれば、「見返りは期待できない」ということです。「自分がこれをしてあげるんだから相手は喜ぶはずだ」という押しつけが始まる時、人は利他を自己犠牲ととらえており、その見返りを相手に求めていることになります。

私たちのなかにもつい芽生えてしまいがちな、見返りを求める心。先述のハリファックスは、警鐘を鳴らします。「自分自身を、他者を助け問題を解決する救済者と見なすと、気づかぬうちに権力志向、うぬぼれ、自己陶醉へと傾きかねません」(『Compassion』)。

アタリの言う合理的利他主義や、「C」の発想は、他人に利することがめぐりめぐって自分にかえってくると考える点で、他者の支配につながる危険をはらんでいます。ポイントはおそらく、「めぐりめぐって」というところでしょう。めぐりめぐっていく過程で、私の「思い」が「予測できなさ」に吸収されるならば、むしろそれは他者を支配しないための想像力を用意してくれているようにも思います。

(出典 伊藤亜紗『「うつわ」的利他——ケアの現場から』 伊藤亜紗 他『「利他」とは何か』集英社新書による)

問一

A・Bに入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば イ なぜなら ウ しかし エ もしくは オ もちろん カ したがって

問二

Cに入ることをわざとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 情けは人のためならず
- イ 火の無い所に煙は立たぬ
- ウ 猿も木から落ちる
- エ 身から出た錆
- オ 塵も積もれば山となる

問三

線1「利他に警戒心を抱いていた」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 他者のことばかり考えることで、自分を大切にできなくなると感じていたから。
- イ 他者への善意が、かえって他者を支配することになりかねないと感じていたから。
- ウ 他者が望まない善意は、人間関係を悪化させる原因となると感じていたから。
- エ 他者に何か良いことをすることで、依存される危険性があると感じていたから。
- オ 他者に優しく接することによって、見下される可能性があると感じていたから。

問四

線2「はとバスツアーに乗っている感じ」とありますが、どういうことをたとえていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 近くにいる人が風景をことこまかに説明し、楽しませてくれるということ。
- イ はじめての場所に訪れる前に、その場所のことを調べておくということ。
- ウ 自分の聴覚や触覚を存分に使い、自然を体感することができるということ。
- エ 自分で認知する前に、晴眼者が先回りして詳しく説明してくれるということ。
- オ 周囲の様子がわからず、どこにたどり着くかわからないということ。

問五 — 線3「信頼と安心はまったく別のものだ」とありますが、「安心」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 赤ん坊の力を信じて、出産直後も数字を気にせずゆつくりと見守ること。
イ 自分の価値観を相手にも当てはめて、相手を理解したつもりになること。

ウ 相手の行動が自分のコントロール下に置かれていると感じていること。

エ 相手が想定外の行動をとっても自分に損はないはずだと心を落ち着けること。

オ 相手のことを思いやり、相手が困らないように先回りして手助けすること。

問六 — 線4「これ」が指す内容を本文中から過不足なく抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。(句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。)

問七 — 線5「それが『私の思い』でしかない」とありますが、どういうことですか。四十五字以内で説明しなさい。

問八 本文の内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 不確実性を意識していない利他は、相手からすればすべて暴力とみなすことができる。

イ 善意が押しつけになり、見返りを求めることになると本当の意味での利他にはならない。

ウ 障害のある人を助けたいという思いは「正義」であり、だれもが実行すべきものである。

エ 「自分自身を救済者と見なすことで問題は解決する」とハリファックスは指摘している。

オ 他者を支配しないためには、利他がどのように自分に返ってくるかを想像すると良い。

〔二〕 中学一年生の「ぼく(雅也)」は夏休みを利用して、北海道に住むおじの家に遊びにきた。近所には志保子さんと栄さんが親子で運営する児童養護施設「北の太陽」があり、「ぼく」は夏休みの間だけそこで過ごすことになった。以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

志保子さんが、ダイニングにみんなを集めた。

栄さんは、夕飯の準備をするため、買い物に出かけている。

開けた窓から風が入る。エアコンはあるけど、まだ動いたところは見ていない。

みんなが、夕飯のときと同じ場所にすわる。

志保子さんがいつものにやかな表情で、みんなの顔をゆつくりとながめた。

瑛介は、テーブルの下で、さつきから足踏^{あしぶ}みしている。帰りの車の中でせっかく海鳴と外で遊ぶ約束をしたのに、と不満をもらす。

「さてみなさん。きょうの午前中、杏奈、ゆず、麻央ちゃんの三人は、ピアノを教えてもらいに行きました。そこで先生に、秋の発表会に出てみませんか、さそっていたいただきました。それだけ、一生懸命^{いっしょうけんめい}に、練習をしているということですよ」

「わあー。よかつたね」

声を上げたのは、瑛介だった。なのに女の子たちは瑛介の声に、むしろうつむいてしまった。

いやな予感がする。

志保子さんは「ところが」と、ひと呼吸おく。

「困ったことに、その発表会に、ドレスを着たいと、杏奈とゆずが言い出しました」

「だって、みんなドレスを着て演奏するって言った」

「みんな？ 本当ですか、杏奈？」

「そうよ。みんな、ドレスを着るって。ね、ゆず」

「う、うん」

「先生も、なるべくドレスがいいって」

語気を強めて、杏奈が主張するということは、志保子さんから、反対されたってことか。

「それはへんですね。わたしが先生に電話をして聞いたら、制服やふだん着で参加する子もいると、おっしゃっていました」
「ズルいよ。電話するとか！」

杏奈がどなる。

ゆずはチラッと、志保子さんを横目でにらむ。

「でも、制服で出るのは、男子だし。ふだん着の子は、ふだんから一生懸命に練習してない」

杏奈は折れる気はないみたいだ。

ほくたち男子三人は、なんとなく、Aと聞いていた。どうしてもめているのか、かんじんなところがわからない。

「志保子さん。ドレスだと、どうしてだめなんですか？」

これくらいなら、Bをはさんでもかまわないだろうと、ほくは聞いた。

「いくらかかるのかは、わかりませんが、そういった予算はここにはないということですよ」

「よさんつて、なに？」

瑛介が C とした目を海鳴に向けた。

「お金だよ。瑛介がほしいおもちやがあっても、お金がなきゃ買えないだろ」

「そういうことです」

志保子さんが、うなずきながら、女の子たちを見る。

「買うんじゃない、借りるの」

「どちらにしても、そういうわがままを言われると困ります」

「こんなのが、わがままですか？」

「ここではそうです」

「じゃあ、もう発表会に出るのあきらめる」

杏奈がふてくされる。

ちよっとかわいそうに思えた。発表会にドレスを着るなんて、普通にやってる家庭はたくさんあるのに。やっぱりここは、普通

の家とは呼べない。

「いいですか。発表会に出るなどは言ってます。ドレスも用意していただけないか、福祉協議会や、ボランティアセンターに問い合わせてみます」

「そんなのいや。ちゃんとしたのがいい」

「杏奈。ちゃんとしたのとは、どういう意味ですか」

「だから、お店に並んでる中から自分で選びたい。ピアノ教室に、パンフレットもあったよ。段ボールに入った服はもういや」

「ちゃんと新しい服も買っているでしょ」

「でも、みんなそんなふうに思っていない。ずっとどこかの倉庫の奥に、何年も眠ってたやつで、安い洗剤とほこりのおいししくないって、そう思っている」

「なんですか。多くの善意を、踏みじるような言い方をして」

「わたしが言ってるんじゃない！」

志保子さんにたしなめられたとたん、杏奈が鋭利な刃物のような目つきになった。

「学校で言われてるよ。くんくんくん、安い洗剤のにおいがするって。いままで志保子さんや栄さんに悪いと思って、だまっていたけど」

よほどがまんしていたんだろう。杏奈のひとみから、涙があふれた。

志保子さんもだまってしまった。

重い空気が立ちこめる。

「ねえ、杏奈、知ってる？」

海鳴は、ここは年長の自分が、どうかしなきゃと思ったのだろう、やさしい声で話しかけた。

「みつばちマーヤの冒険の中に、こんながある。——運命がひきはなしたものを、またいっしょにしてはならないよ、という、ばらこがねのクルトのセリフ。

どういうことだと思う？ ぼくはこう思う。ぼくたちは、ぜいたくとはけっしていっしょになれない運命なんだ。だからぜいたくを知ってしまうと、いつか身をほろぼすことになる。もちろん将来、自分の力でぜいたくできる境遇になれば、それはいいと

思うけど」

「ドレスを着るって、ぜいたくなの？」

目を真っ赤にして杏奈はうったえる。

「いまのぼくたちにはね」

海鳴は、きせんと答える。ぼくは胸が苦しくなった。³

海鳴がぼくを見て言った。

「雅也はどう思う？」

「えっ、ぼくの意見？」

「だって、北の太陽の一員だもん」

海鳴は平然と言うけど、ぼくには答える準備もなければ、経験もなかった。

杏奈やゆずが、ドレスを着たい気持ちは理解できる。でもお金の問題となると、話はちがってくる。

海鳴は志保子さんにも気をつかっているのだろう。そう考えると、ここで自分の考えを主張するなんて、こっけいな気がする。

「もしかして、自分の気持ちがないの？」

「いや、そんなことないけど」

「自分の意見に、自信がないとか？」

「それは……あるかも」

ぼくの意見は、よくクラスの和を乱した。

「話しても、だれかを不快にしようか。そう考えると、話すことに意味があるのかなって、そう思う」

「それでも、わかりあうためには、言葉にするしかないと思う。ここではみんなが自由に発言できる。みんな同じ太陽の下にいる。

だから、もしなにか思っているなら、話して」

⁴ぼくはとでもうれしかった。いままで自分の言葉を、こんなにていねいにあつかってくれたのは、両親とおじさんだけだ。

「それなら言わせてもらおうけど、ドレスは着せてあげたい。それはあたりまえの感情だし、かなえてあげるのは、大人の責任だと思おう。たとえドレスが似合わないとしても」

ぶつと、海鳴が吹き出した。

「えつ、なにかおかしい？」

「あ、いや。それでいいよ」

応援おうえんしたつもりが、杏奈もゆずも、ぼくをいやそうな目で見る。

「ねえ、志保子さん。お金なら借りればいいじゃないですか」

ぼくなりに考えて言った。

「そういうくせを、いまからつけてほしくありません」

志保子さんはがんとして、意志を曲げる気はないみみたいだ。

「瑛介はどう思う？」

海鳴が聞くと、

「ぼくもドレス、きてみたい」

と、的外れなことを言つて笑わせた。

みんなの気持ちがあつとほぐれると、それを機に、

「まだ三か月先ですから、ゆっくり考えましょう」

志保子さんが、長期戦ちがくせんをほのめかした。杏奈たちが妥協たきようしたり、ましてや忘れるなんてことはないだろうけど。

(出典 村上しいこ『みつばちと少年』講談社による)

問一



A・Cに入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア AⅡかちん CⅡぎよつ

イ AⅡぼかん CⅡきよとん

ウ AⅡしんみり CⅡいらつ

エ AⅡだらん CⅡぎらつ

オ AⅡほっこり CⅡとろん

問二

□ Bに入る体の部位として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 口 イ 耳 ウ 顔 エ 首 オ 手

問三

〰線 a 「たしなめられた」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 冷やかされた

イ おどされた

ウ 質問された

エ 注意された

オ あきられた

問四

〰線 b 「長期戦」は「長期+戦」という組み立てになっています。これと同じ組み立ての三字熟語を次の語群から選び、ひらがなを漢字に直して答えなさい。

語群 「 だい は っ け ん う ん ど う じ ょ う こ う せ い ね ん み か ん せ い い し ゃ く じ ゅ う 」

問五

―線 1 「よかったね」とありますが、何がよかったですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ピアノを教えてもらったこと。

イ ドレスを貸してもらえたこと。

ウ 志保子さんにほめられたこと。

エ 一生懸命に練習をしていること。

オ ピアノの発表会に出られること。

問六

―線 2 「志保子さんから、反対されたってことか」とありますが、どうすることを反対されたのですか。「〜こと」に続くように、本文中から六字で抜き出しなさい。(句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。)

問七 — 線3 「ぼくは胸が苦しくなった」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

い。

ア 杏奈が懸命にうったえているにもかかわらず、不親切につっぱねる海鳴の対応に腹が立ったから。

イ ドレスを着ることすらぜいたくに当たるという現実を目の当たりにしてやりきれないと感じたから。

ウ 自分がぜいたくしていることをそれとなく指摘されているようで申しわけなく思ったから。

エ 一生懸命にピアノの練習をしてきた杏奈たちがその成果を発揮できないのは残念だったから。

オ 自分の意見を求められる予感として、なんとか意見を言わずにすむ方法はないかとあせったから。

問八 — 線4 「ぼくはとでもうれしかった」とありますが、なぜですか。四十五字以内で説明しなさい。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 次の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

① 料理のテジユンをメモする。

② 取材をタントウする。

③ エダマメをゆでる。

④ 立ち入りキンシ。

⑤ カイコが糸をはく。

問二 次の——線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

① 街灯の下に立つ。

② 流水で冷やす。

③ 最初の計画を改めた。

④ クラスで合唱した。

⑤ 薬草を研究する。

